# さよならのホームイン

大輔華子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
さよならのホームイン

【Ｎコード】
Ｎ７１６９Ｖ

【作者名】
大輔華子

【あらすじ】
野球オンチな母親が夫の遺志を継ぎ子供に野球をさせることになった。
しかし母子ともにその想いとは裏腹な方向へと導かれていってしまう。
くじけそうでくじけない子供。
子供を支えているものはいったい何であろうか。
そこには、親から受け継げられた目に見えない『力』が有ったのかも知れない。

この物語はいわゆる「少年野球モノ」に有りがちな「熱血」「ほのぼの」とは異なった展開で構成されています。そのため「R15」にしたいと思います。
（15歳未満の良い子は閲覧しないでね。）
【華】

## <序>

M市少年野球秋季トーナメント大会。

最終回七回の裏、一対〇の僅か一点差を追うレッドダイアモンズ最後の攻撃。

二アウトランナーは一塁。

打席ではやや小柄なバッターが緊張した面持ちでバットを垂直に構える。

じっと腕組みしている監督。大声をあげるコーチ、ベンチで声を枯らして応援する選手。そして、選手の母親たちのほとんどは、顔の前に両手の指を絡ませながらのお祈りスタイルである。

小学生とは思えないような体格のいい左腕の相手投手は、一塁ランナーを睨んでボールをセットした。

最後の一球となるかもしれないボールをビュンと腕をふってキャッチャーミットめがけ投げ込んだ。

## 酒井真吾の夢

この春に、夫婦と今年小学校にあがる子供の三人家族はこの地にマンションを購入し入居した。

夫の名は酒井真吾、妻は由華（ゆうか）、子の名は知春（ともはる）という。

結婚した当初より、夫婦二人は東京都内のアパートに居を構えていたが、このマンションに入居が決まったその半年前に夫真吾の食道癌がみつかり食道を全摘出する大手術が施された。

術後の経過はあまり良くなく、かなり危険な状態での肺炎を数回発症し、一時は意識までを失うこともあった。

当初の危険を何とか乗り越えた夫真吾は退院し、その後特段危険な状態になることはなかったが、最近のマンション入居直前になって癌は胃での再発が発見され、またも手術入院を余儀なくされた。

胃を切除してからというもの、夫真吾は普通の食事など到底出来る状態にはなくなった。延命との引き換えに声帯を取り、声をも失うこととなった夫真吾は、自分は死を待つばかりで、『退院』という選択肢がすでに失われていることを覚り、余命があと何ヶ月なのかわからないが、残された期間を妻と子供の三人で過ごしたいと医師に熱望し、週二回（二泊）の院外外泊を特別に許可された。

新居での週二回の生活は夫真吾にとって大きな夢であったし、小学校入学直後の子供の話を聞くのが唯一の楽しみであった。

入院と治療の費用は、幸いほとんど癌保険の保険金でカバーされたが、夫真吾は二度目の手術入院と同時に会社を退社していたので、僅かながらの退職金だけでは当面の生活費すら賄いきれず、妻由華は土日を含む週五日のパートに出かけた。

マンション購入の際に組まれた住宅ローンでは、契約時にすでに夫真吾の食道癌が発見されており、契約者である夫の癌発見時や死亡時の借入残金の補償はつけられなかったため、月十一万円ほどのローンの返済も大きく家計にのしかかってきた。

しかし新築マンションの購入とそこでの生活は夫真吾の大きな夢の一つであったので、由華にはこれを手放そうと促すことはどうしても出来なかった。

そして、夫真吾の二つ目の夢は、子供を少年野球チームに入部させ、一緒に野球をすることだった。

夫真吾の実家は購入したマンションから車で十五分ほどのところにあった。彼はこの地で生まれ育ち、小学校時代には地元の少年野球チームであるレッドダイアモンズで野球を学び、それからは、高校を卒業するまでずっと野球を続けていた。今もそのレッドダイアモンズは地元で活動をしていて、六十人ほどの小学生が日曜日になると集まり練習をしている。

マンションの真上の階にはチームの総監督がいて、夫真吾は外泊日には時々彼の一室に行き、野球の話を語り合うようになった。語り『合う』といっても、声を失った夫真吾の話は痩せこけた手で綴る筆談である。

医師が妻由華に二度目の手術後に告げていたとおり、夫真吾は入居後三ヶ月の日を待たず、病院で両親と妻子に見守られながらついに息をひきとった。

## 体験入部

夫真吾が亡くなって約一年が経った。

生活は相変わらず苦しかったが、由華は夫の実家からの仕送り援助にも少し甘えながら、母子生活も少しづつ落ち着いてきた。

そんなある日の日曜日、由華は二年生になった子、知春を連れて江戸川河川敷の少年野球練習用グランドにいた。そこでは体験入部のさまざまな企画が行われていて、お土産の鉛筆と勧誘用のチーム名の入った下敷きが配られていた。子供と野球をするという、亡き夫の二つ目の夢は実現しようにもなかったが、由華は夫が亡くなってからは、せめてもの子供に野球をやらせて天国にいる夫に見せてあげようと考えていたのだ。

まずは、同じマンションの増島総監督のところへ行って子供と一緒にご挨拶。

低学年は五、六メートル離れたホームベース上の大きな布製の的へボールを投げるストラックゲームとゴム製の棒の上に乗せたボールを打つバッティングゲーム。

増島総監督はニコニコしながら、知春の頭に掌を置いて言った。

「そこに並んで投げてごらん」

入部希望の子供が並んで自分の順番を待つ。　皆、子供なりにいいところを見せようと真剣である。

子供の手にはやけに大きく見えるボールを持ち、知春は大きな布製の的へ向けてそれを投げた。

山なりのボールははるか的の上を通り抜けてその先のバックネットに直接ぶつかった。

「はずれ、残念」

的に当てた子供は小さな袋に入った飴を四つもらう。外した知春は二つだ。

「ほう」

増島総監督はニコニコしながら声を出した。
「バックネットに直接届いたねえ。すごいすごい」
「投げ方がいいなあ。リリース前には肘がきっちり的に向いてる。誰かに教えてもらったかな？」と背の高いコーチ。
知春の次は同じクラスの鎌谷裕也君だ。
裕也君は野球選手のように大きく振りかぶって投げた。知春と違ってかなり早い球が、地面に当ってツーバウンドで的に当った。
「当りい！！」
さっきのコーチが叫んだ。

――今のずるいよ！

咄嗟に由華の口はとんがった。
「あっはっはっは」と増島総監督。
子供なりに納得いかない裕也君はもう一球投げると言う。
「よし、じゃあ特別だ。次の子ちょっと待っててね」
次に並んでいた女の子がちょっと不満そうだ。
裕也君はいよいよ真剣だ。また大きく振りかぶって投げた。今度はさっきよりもさらに速い球がホームベースに直接当って、そのまま的の下を転がっていった。

## レッドダイアモンズ

由華は野球の練習のある日曜日は、練習場所の学校の校庭や河川敷のグランドにまったく行ってあげることが出来ない。　日曜日はパート勤務先のスーパーの書き入れ時でほとんど休むことが出来ないからだ。

由華のマンションの隣には同じ時期に入部した二年生の和田順平君という男の子がいて、その子の母親がある日廊下で出会った由華に忠告をしてくれた。

どうやら夏場の練習はお母さんが順番でジャグジーや氷水、タオルなどを準備して、総出で選手である子供たちの世話をしているらしい。日曜日にまったく子供たちの世話が出来ない由華に対して、母親たちの不満がつのっていて、陰口をたたかれているというより、もう堂々と『悪口』が出回っているらしい。

「今度の日曜日、江戸川第四グランドで、低学年の二部チームの初めての練習試合があるんだけど、これには行って応援したほうがいいわよ」

低学年の二部チームという意味すら由華にはわからない。

由華は、和田さんにいろいろとチームのことを教えてもらうことにして、彼女を近くのお茶を飲む店に誘った。

レッドダイアモンズには三つのチームがあって、一つは高学年チーム。これは六年生と五年生で編成されているチームだ。公式戦では高学年の部にエントリーする。監督は橋爪さん。

二つ目は低学年のレギュラーチーム、つまり一部チームで四年生と三年生の一部からなるチームだ。公式戦では低学年の部にエントリーする。監督はこのチーム選手の父親の堂村さん。

三つ目は一年生から三年生までのチームで、これが和田君や知春の二年生がいる二部チーム。三年生のうちちょっと実力の足らない子と二年生が中心だ。公式戦にはエントリーしないが、個人的には

一部チームとの間で入れ替えが行われることがある。監督は一部チーム選手の父親の青山さん。ヘッドコーチは知春と同じクラスで体験入部の時知春の後に投げた、鎌谷裕也君のお父さんである。

そして全体の監督は由華のマンション階上の増島さんだ。増島さんは高校二年と三年の時、茨城県代表の高校で甲子園まで行って出場した人だという。

次の日曜日の練習試合では、三年生の二部の子とこの春に入部した二年生が全員加わって他のチームと対戦する、いわば新結成チームのデビュー試合だ。

一部チームに昇格したい三年生、三年生になったら一部チームに入りたい二年生の子供たち。

その子供たちもさることながら、親のほうがかなり真剣である。

「試合に自分の子供が出るとか出ないじゃあなくて、ともかく応援や手伝いに行くことは必要よ」

和田君のお母さんは厳しい顔でダメを押した。

由華は、次の日曜日は、夏風邪をひいたことにして仕事をズル休みして応援にいくことにした。

## 応援デビュー

練習試合の開始予定は午前十時である。場所は市内なので、車で二〇分弱の近距離だ。それでも普段の練習場所の小学校の集合時間は朝七時だ。

子供の数は全部で二五人。

一年生が三人。

二年生が十五人。

三年生が七人。

大人はというと、なんと全部で三六人だ。増島総監督、二部チームの青山監督、鎌谷ヘッドコーチ、他に選手の父親コーチが三名。コーチ以外の父兄は母親が全員の二四名、（一年生と三年生両方に子供がいる親が一名いる）、父親が六名。

由華は学校まで和田さんと一緒に行ったが、校内では和田さんが母親集団の中にすうっと入っていって完全に孤立した。

わいわいがやがやというよりも、母親のピーチクパーチクが騒がしい。

母親たちはじろじろと由華のほうを横目で見ては、これ見よがしにこそこそと互いに耳に掌を当てながらしゃべっている。

母親の一人が話しかけてきた。

「あんた、もしかして知春君のお母さん？」

「はい。そうです」

何で向こうがタメ口で、こっちが敬語なの？と由華は思ったが、これは仕方がないな、と我慢した。

他の母親が大きな声で言った。

「ええっ？　トモくんのお母さん！　今日はいったい何？」

――今日は何？　って。何よ！　応援に決まってるじゃない！

由華はそう言いたかったが、言葉をぐっと飲み込んだ。
「ちょっと、試合を応援させてもらおうかなと思って……」
若い茶髪の母親が言う。
「まっさかあ。試合の時だけ来るってそんなことってあるのかしらね。信じられない」
眼鏡をかけた顔も体も真ん丸い母親が合いの手を入れる。
「うそでしょ？　うそ、うそ、有りえない！」
かなり露骨な言い方である。しかし、由華は、かえってこそこそと何か言われて無視されるよりは、ストレートでいいと思った。
少し離れていたところでこれを聞いていた増島総監督が苦笑いをした。
ユニホームを着た父親コーチの一人はちょっと由華を指差して、他のコーチに何やら耳打ちをした。
指差されて気分を害さない人間はいない。
とたんに由華は頭に血がのぼる自分を感じた。
そのコーチに近づいていって言った。
「すいません。知春の母です。息子がお世話になっています」
「ああ。どうも、トモくんの。よろしく。ねっ！　奥さん」
完全に馬鹿にされたと思った由華は、その時ちょうど足元に転がってきたボールを拾い上げて、少し離れたところで帽子をとりながらグローブをかまえる鎌谷ヘッドコーチに向かって力いっぱいそのボールを投げた。
ボールは鎌谷コーチが腕をのばしたグラブの遥か上を通過していき、ずっと先で向こう側を向いて立っていた青山監督の後頭部にぶつかって地面を転がった。
「あっ！」
その場にいた皆がそれぞれに小さな声をあげた。頭をかきながら振り向いた青山監督に向かって、鎌谷コーチは必死で由華のほうを指差した。
「おっ、俺じゃない！あのお母さんが投げたんだ！！」

青山監督の半径四十メートルくらいのところには鎌谷コーチしかいない。
しかも由華はそこからさらに十五メートルくらい離れている。
それでも必死で由華のほうを指差す鎌谷コーチに対して、青山監督は首を横に振って、鎌谷コーチを指差した。
「子供が真似するからやめとこうな。そういうの」と青山監督。
由華は、すいませんとも言えずに小さくなっていた。

## 練習試合

ランニング、キャッチボール、内外野の守備練習などが一通り済んで、子供たちは監督・コーチと父親の車に分乗して江戸川河川敷の江戸川第四グランドに向かっていった。

由華は子供たちが校庭でウォーミングアップをしている間中、ずっと自分の息子、知春を見ていたが、最初から最後まで皆から離れて三年生の子とキャッチボールばかりしていた。

由華は寂しかったが、子供はもっとつらいのだろうと思い、ぐっと自分の気持ちを抑え込んだ。

◆◇◆

グランドに着くと皆子供たちは二列に向き合ってキャッチボールを始めた。その時の列の中にも知春の姿はなかった。離れたところでさっきの三年生とキャッチボールをしている。

「ようし、集合！」

青山監督は子供たちを集めた。親たちもぞろぞろと集まってくる。

和田君の母親が隣の由華に耳打ちした。

「スターティングラインナップよ」

「スターティなになにって？」と由華。

「試合の先発よ」

「？」

「試合に出る子供！」

「みんな出るんじゃないの？」と由華。

「あきれた……。あのね。あなた野球は何人でやるって知ってるわよね」

「はは。馬鹿にしないで。九人でしょ」

「だから最初にでる九人のことよ」

「ああ……。そうか」
青山監督は読み上げた。
「一番、サード白井！」「はい！！」
「二番、ライト鎌谷！」「はい！！」
「三番、ピッチャー酒井！」「はい！！」
「四番、キャッチャー大迫！」「はい！！」
……。
和田君の母親がニコニコして後ろにいた由華に振り向いた。
「凄いじゃない！トモくん三番でピッチャーよ！！」
「ええっ！？」
「ウチの順平、九番セカンドだ。先発は二年生が十五人中三人だけよ。ライトの鎌谷裕也君と三人。三年生は一人先発から外されたわ」

◆◇◆

試合の方は、知春がぽんぽんとストライクを入れていき、相手チームの『見逃し三振』の山を築いていく。ちょっと山なりのボールだが、何しろコントロールが抜群だ。
相手チームの監督は完全に作戦が裏目に出たようである。子供を呼んで指示をするその声は反対側ベンチのこちらのほうまで聞こえる大声だ。
「ボールを見すぎるな！」
「ドンドン振ってけ！」
しまいには、「ストライクばっかだぞ！！」
低学年の二部チームはストライクが入らずに試合にならないことも多い。振ってしまったほうが負け、みたいな寂しい展開である。相手チームは試合に勝つという喜びを早く子供たちに教えてあげようと、ボールを振らせないことに集中してきたようである。
ところが、知春の投球は七割か八割方がストライクであり、ぽんぽんと小気味よく投げてくる。

試合は七回までだが五回までは両チームとも珍しい『〇』の行進だ。
レッドダイアモンズの三年生はやはり二部チームの子供たちだけあって、打てない守れない走れないの三拍子揃った子供がほとんどだ。相手チームがともかく早いカウントからバットに当てることに専念し転がしたりしてくるようになると、ピッチャーゴロ以外はほとんどセーフになっていった。
青山監督が、もっと球を散らしていけ、とおおっぴらに指示すると、それを聞いていた球審は、とたんにきわどいコースの球をストライクにとらなくなってきた。
相手投手は低学年の割に背も高く、角度もある適当な荒れ球で、突破口が開けない。
七回最終回に『〇』の均衡は破れ、味方チームのエラーが七つ続いてついに五点を取られた。
その裏の最後の攻撃も三人で終わり、レッドダイヤモンズでのデビュー戦は五対一で敗北した。　味方のヒットは、キャッチャー大迫のホームランと知春のシングルヒットの二本だけだった。
由華は試合が終わるまでずっと仲間はずれだった。
そもそも応援の仕方もわからないので、声も出せない。試合が終わりしょんぼりしていると増島総監督が近寄ってきて言った。
「知春君はいいね。高めの球は腕が良くふれてバッターの手元で伸びてくる。低めはナチュラルに落ちるし。バックがきちんと守ってやれば使えそうだぞ。一部の子供はあんなに守れなくはないからね」
試合に出た子供の母親たちは、自分の子供がエラーしたことなど全く意に介さない様子で、逆に知春が最終回に突然点をとられたことに対して、ピッチャーを交代させなかった青山監督に白い目を向けていた。
青山監督は、試合後子供たちを集めて母親たちの耳を意識して言った。
「相手ピッチャーによって、打てないということは誰にでもあるこ

とだ。これはいろんなタイプのピッチャーと対戦していくうちにどんどん上達していく。これから一生懸命練習を積めばいい」
「しかし、守れないのは野球をやっている者にとっては恥だ。相手のせいではないからだ。すべて自分のせいだ。」
青山監督は、母親たちに向かって、

――ざまーみろ。べーだ。

というような顔をしてみせた。
子供たちは泣きながら下を向いている。大人の難しい言葉の意味など理解出来るはずがない。その場の『絵』は青山監督が一人で子供たちをいじめているような感じになってきてしまった。
母親たちは、

――子供が泣いているのに追い討ちをかけて、この人でなし！

というような表情をして、監督にさらに厳しい視線を送った。そして母親の一人は隣にいた母親に大きな声でこう言った。
「だいたい、相手チームのピッチャー。低学年の試合であんな高学年みたいなピッチャー出してくるのってずるくない？」
「そうそう。みんな小さい体で精一杯がんばってるのにフェアじゃないわよ」
青山監督は母親にはとても勝てないと思いそれ以上何も言うまいと心に決めた。

## 白井君のこと

低学年の二部チームにいる白井君の父親は個人で宝石商を営んでいるらしい。

先の試合では白井君はサードを守っていた。

最終回にエラーが続いてノーアウト満塁となった時、監督は最悪一点か二点は仕方がないと考え、本塁フォースアウトではなく、ともかく近いところで確実にアウトを一つずつ取るように指示を出した。

そのあと、白井君の守る三塁後ろに小フライが上がり、皆まずはほっとしたのもつかの間、白井君はこのボールをおでこにぶつけてエラーしてしまった。おまけに拾ったボールを一番近いところと言われていたので、こともあろうに自分が抜けて誰もいない三塁に送球してしまい、走者一掃の大量点を取られてしまったのだ。

先輩白井君の訳のわからない守備にマウンド上で呆然とし、ボールを拾いに行くことさえも忘れる知春。味方のエラーが続いてもぐっと堪えていた知春の緊張の糸は、ここで一気に切れたといってもいい。

ところがそのあと二本続けてヒットを打たれた知春に対し、「トモー！　バックを信じてしっかり投げろー！」と的外れの応援をしたのは、白井君の母親であった。

その場にいて応援していた白井君の父親は、これはさすがにまずいと思ったのか、由華の立っている隣へ謝りにきた。

由華には意味がさっぱりわからなかったので、はいはいと応対するしかなかったが、白井君の父親は丁寧に謝ったあと、お詫びにアクセサリーを譲ってあげますと言ってきた。

「酒井さんにお似合いのブローチがあるんですよ。おもちゃみたいなものですが……」

そう言って白井君の父親は本当におもちゃのようなブローチ三つ

を由華の手を取り無理矢理渡してきた。
一つ目は磯浜の岩の陰にいる蟹を形取ったもの。趣味はお世辞にも良いとは言えない。
もう一つは目の大きいイカ。これは全くいただけない。どこかのスルメの乾き物の袋に書いてあるような幼稚なデザインだ。
三つ目に至ってはタコがハチマキをしている。これを見てさすがに由華は思った。

――これ、いったいどんなところに行く時に付けていけというの？

由華は掌を白井君の父親へ向けて言った。
「いえいえ、そんな。やめて下さい。私は何もしていませんから」
「要りませんか。そうですか……。やっぱり、安物ですものね」
「あっ、いえ、決してそんなつもりでは」
「じゃあ、貰っていただけますね？」
「はっ、はい。ありがとうございます」

## ある日の事件

市内の少年野球連盟の春季大会へ向けて新しいチームでの練習が始まった。低学年の試合の方は一部二部別々に行われるが、普段の練習は合同だ。

一部チームは四年生が十名、三年生が八名の十八名。二部チームは二五名いるから総勢四三名だ。

相変わらず由華はパート勤務先のスーパーでの仕事が忙しく、他の母親のように練習を見たりお手伝いをしたりが出来なかった。他の母親は一日中ずっと練習を見ているかというと決してそうではなく、普段は朝の一時間程度のおしゃべりと夕方のお迎えだけである。

しかし、そのちょっとしたことの積み重ねが熱心さをアピールし、片やチームに協力的でない母親との大きな差を生んでいく。

夏は特に子供たちの熱中症に気を遣うので、当番になった母親はベンチまわりでも活躍し、普段あまり練習に顔を見せない母親との差は益々拡がっていく。

最初の練習試合から三週間経った日曜日、由華は仕事を休んで江戸川河川敷の練習場所に行った。ところがそこでは由華にとってどうにも我慢の出来ないことが起こった。

由華がグランド脇に姿を見せるなり、彼女はいきなり近づいてきた白井君の母親に横っ面を引っ叩かれたのである。八名の監督コーチのうち近くにいた四名が驚いて二人の方を見る。子供たちはグランドで練習しているので、そのうち何人が気がついたかよくわからないが、少なくとも数名の子供は動きを止めた。

「あんた！　どの面さげて私の前へ来ることが出来るの？　ええ？」

他の母親は全く驚いたような様子はないが、皆横を向いている。

由華は叩かれた頬を押さえながら、何といっていいか全くわからない。

――練習に付き合わないだけでこんな酷いことをされるの？

由華は冷静に考えていくらなんでもそんなはずはないと思った。ともかく聞いてみるしかない。

「何のこと？」

白井君の母親は由華を睨みつけてその後何も言わずに他の母親の輪の方へ歩いていった。

子供たちが練習している間中、由華は訳もわからないまま、ただ一人で皆と離れて立っていた。　子供たちも監督コーチたちも、何ごともなかったかのように大きな声を出して練習に没頭していた。知春はというと、グランドの奥の方で他の五人の子供たちと一緒に外野守備のノックを受けていた。内野練習では、マウンド上で鎌谷裕也君がピッチャーをしていた。

――知春、ピッチャーじゃないんだ。

由華は相変わらず野球オンチであったが、知春の守備位置がピッチャーから外野のどこかに変わったことだけは気が付いた。

## 監督コーチ会議

その後、由華はチームの練習がある日曜日、月に一回パートの仕事を休み、練習を見にグランドへ足を運ぶようになった。当日練習試合のある日は、前日の土曜日の午後も練習をすることがあり、月に五・六回グランドへ通う他の母親からすれば、子供の野球に熱心でない親ということで由華は敬遠され続けた。しかし、由華が皆から無視される理由はもっと根深いところにあった。

同じマンションで隣の和田君の母親だけはグランドでも唯一人由華に話しかけてくれていたが、ある日由華は和田君の母親から俄かには信じられないことを聞かされ仰天した。

知春と同級の和田君の父親は野球経験がほとんどないのでコーチではなかったが、せっせと練習の手伝いをしたりスコアブックのつけ方をマスターしたりと、とても熱心だったため、低学年の親ながら全体の父母会長に就いていた。父母会長は監督コーチ会議に出席して色々と情報交換したりして、増島総監督と同じくらいの発言力を持っている。

和田君の母親は、二ヶ月前の監督コーチ会議での様子について由華に詳しく話をしてくれた。

◆◇◆

その日の監督コーチ会議には特別に白井君の母親と鎌谷コーチの奥さんが出席していた。

和田君の父親が白井君の母親に発言を促すと、彼女は興奮したように話し始めた。

「酒井知春君に関する件で、ご相談があります。実は、個人的なことでお恥ずかしい限りですが、今後のチームの運営に重大な影響があることですので、あえてお話しすることにしました。短刀直入に

事実だけ申します。酒井知春君のお母さんは未亡人で、私の夫をたぶらかして浮気の行為を重ねています。このことは実際に私の夫の口から聞いたことですので間違いありません。皆さんコーチの方は知らない方もおられるかもしれませんが、今や母親たちの間では知らない人はいません」

増島総監督は彼女の話を半ばさえぎるように言葉を発した。

「そのことは私も青山監督から聞いていますが、チームの運営に重大な影響があるとは思えませんよ。いったい、何を言われたいんですか？」

白井君の母親は背筋を伸ばして増島総監督の方へ向き、はっきりとした口調で言った。

「練習試合でも一部の敏感な方は既にお気付きかと思いますが、母親は皆一様に酒井知春君のお母さんに憤りを感じていて、ある母親は子供にも知春君とはあまり話をしないように言っているらしいです。知春君が打席に立った時、母親も子供もけだるそうに応援している様子が監督やコーチの皆さんはお気付きになりませんか？」

まるで「あなたは鈍感です」と言い切るような言葉に増島総監督は突然立ち上がった。そこにはいつもの温厚な彼の面影はなかった。

「関係のない選手子供に妙なことを吹き込む母親には、野球どころかそもそもスポーツに携わる資格などありませんぞ！　誰がそんなくだらないことを言っているんですか！？　ええ？　白井さん！震源地はあなたでしょう！」

慌てた和田君の父親が隣の席から増島総監督に着席するよう求めた。しかし、これを聞いて白井君の母親が黙ってはいない。

「ちょっと待ってください。震源地ってどういう意味ですか？　私を悪者呼ばわりするんですか？　あなたは！」

そこへ同席していた鎌谷コーチの奥さんが口をはさんだ。

「増島さん。失礼よ！　撤回しなさいよ」

慌てたのは鎌谷コーチだ。

「おっ、おい。お前なんてことを」

「あなたは黙ってらっしゃい！」
「あっ、はっ、はい」
鎌谷コーチの奥さんは増島総監督を指差して言った。
「あなたは、どこへ向かって怒っているのですか？　いったい悪いのは誰なんですか？　増島さん。物事の善悪も判断出来ない人に、人を指導することなんて出来るはずないんじゃありません？」
鎌谷コーチは思わず目をつぶった。

――ああ、言っちまったぜ。こいつ。ヤバ。

増島総監督は今度は逆にゆっくりめに言った。
「事実がどうか知りませんが、そうだとしたら確かにそれは大変なことですよ。でも、それでもって関係のない人間、ましてや子供を巻き込むってのはもっとずっと最低のことだ」
増島総監督は、「俺は気分が悪くなったから退席する。橋爪監督。会議の方は続けてくれ」と言い、部屋を出て行った。
あとを任された高学年の橋爪監督は目を白黒させた。

――何で俺が低学年チームのいざこざを持ち込まれなきゃならないんだよ。勝手にやってくれって言いたいよな。

「勝手にやってくれって言いたい……！　うっ！」
橋爪監督は思わず思っていたことを口にしてしまっていた。
「橋爪さん。今、何と仰いました？」と鎌田コーチの奥さんが言う。
「あっ、いっ、いや。知春君にチームをやめてもらうのはちょっと酷だと思いますが、ピッチャーはやめて、試合では取りあえず代打かなんかで使っていくしかないんじゃないでしょうかね。客観的な立場としてはそんな風に考えますけどね」
鎌田コーチの奥さんの顔色が急に良くなった。
「ね。そうでしょう。親が応援にもこない、父母会の風紀も著しく

乱す。知春君が投げていても誰も応援しないしね。結果としてチームが乱れるってことは事実でしょ？　それでは勝てるわけありませんものね」
「あの、俺、そこまで言ってませんけど……」
「あら、そうかしら？」
鎌谷コーチの奥さんは勝ち誇ったように白井君の母親の方を見た。彼女も、少し気が晴れたような表情をしていた。

◆◇◆

――そういうことだったのか……。

由華は和田君の母親の話に耳を傾けていて、最初の試合後初めてグランドへ行った際に白井君の母親に罵声を浴びせられ頬を叩かれた時のことを思い出した。
由華には全く身に覚えがないことだった。由華は何故白井君の父親が奥さんにそんなことを言ったのか理解出来なかった。しかし、いつも、そして今でも由華の胸には白井君の父親からもらった、磯浜の岩の陰にいる蟹を形取ったブローチとタコがハチマキをしたブローチが付いていた。ブローチをいつも大切そうに付けて近所を歩いている由華の姿が、白井君の父親にある種の妄想を抱かせてしまったのかもしれない。

――なんて罪深いブローチなの？　これは……。

由華はその二つのブローチを外した。和田君の母親はバツが悪そうに上目使いに由華の方を見てから俯いた。

## 暗黙の了解

三年がたった。

知春はもう五年生になっていた。これまでの三年間、知春は練習試合でも公式戦のリーグ戦やトーナメント大会でも、試合と名の付くものには唯の一度も守備につくことはなかった。珠に訪れるチャンスにも代打として打席に立つこともなかった。知春が打席に立つ時はいつも大量リードされた場面の最終回でしかなかった。

由華は試合の有無に関係なく、月に一度のペースでグランドに通い続けた。もちろん彼女に話しかける母親もコーチもいない。つらい思いをしてまで子供に野球を続けさせてきた、そこには彼女なりの意地があったのかもしれない。ただ、子供が苦痛を感じるのであれば辞めさせようと思っていた彼女にとって、いつも嬉しそうに練習をしている知春の姿は大きな勇気となっていた。

――あなたは心底野球が好きなのね。

今は亡き夫も野球の話をする時はいつでも真剣で、そして楽しそうだった。由華はかつて増島総監督から少年野球時代の夫の活躍を聞かされていた。夫はその昔、レッドダイアモンズで五年間エースピッチャーとして活躍をしていたらしい。高学年の時はM市の選抜メンバーのエース・三番打者として県大会のベスト四まで勝ち進んだともいう。

知春は確実に夫の血を引き継いでいると由華は感じた。

知春の試合前のキャッチボールは相手チームの監督・コーチ陣をぎょっとさせることがあった。　明らかにレギュラーと異なる背番号十九番を付けて相手チームの目の前でする知春のキャッチボール。

見るからに美しいフォームから繰り出される彼のボールは遠く離れた相手の胸のど真ん中へ糸を引くような見事な軌道を描いて相手

のグローブへと納まった。
「うんうん。あの子は球の回転が素晴らしいですね。さすがはレッドダイアモンズのコーチの指導だけある」
レッドダイアモンズの監督・コーチは対戦チームの監督にそう言われ、皆何となく苦々しい表情となった。

増島総監督は、あの時の監督コーチ会議を境にユニホームを脱いでいた。レッドダイアモンズの試合を見に来ることもなくなった。しかし、彼はM市の少年野球連盟へはチームの総監督として登録されたままになっており、彼の現役時代の実績とともに監督としての指導力は関係者に定評があったことも理由になって、この年秋季トーナメント大会から連盟の理事の一人として加わることとなった。
久々にユニホームを着て大会会場へ姿をあらわす増島総監督。レッドダイアモンズの監督・コーチのみならず、他のチームのスタッフも皆彼には一目を置いており、直立して脱帽し挨拶をしていた。
知春が五年生となってからのチームは、六年生の青山君を主将とし、監督は低学年時代から繰り上がってきた青山監督が仕切っている。他の指導者も当時低学年のコーチだった鎌谷さんがヘッドコーチでコンビを組んでいる。今の六年生は青山君を初めとする強打者が三名揃っており、攻撃力は他のチームより頭一つ抜き出ている感があるが、投手を含む守備が頼りなく夏の大会では二回戦敗退となった。六・七年前のレッドダイアモンズは三二チームで争われるトーナメント戦で夏と秋の両大会で準優勝と優勝という輝かしい実績を誇った。
今の六年生は一年上の学年にいい投手が数名揃っていたため、この学年では投手経験のある者がいなかった。そこで今年からリーグ戦も夏季大会もすべて五年生の鎌谷君が投手を任されていた。
鎌谷君は低学年時代からそうであったが、素晴らしい速球の持ち主である。今では速い時には百二十キロを超える剛速球を投げる。相手打者はことごとく振り遅れ、ほとんどバットに触れることが出

来ないほどである。　しかし、鎌谷君が勝てない理由ははっきりしていた。彼はランナーを背負うと突然ノーコンになりいつも決まって自滅するのだ。きわどいところにボールが外れるのではない。ホームベースの数メートル前でバウンドしたり、捕手が跳び上がっても届かないところへボールがいったりすることはざらだ。一年前低学年の大会で突然ストライクが入らなくなりマウンド上で泣いてしまったことがある。こうなると投手を続けさせることは出来ない。彼はいわゆる投手にあるまじき『ノミの心臓』なのである。あとを引き継いだ和田君はもともとボールの手離れが良くないので、ストライクを取りにいくと相手打者にとって最も打ちごろのバッティング投手同然となる。鎌谷君が崩れた時、監督は口にこそ出さないが心の中ではその試合を諦めるしかなかったのだ。

　それでも監督は、知春を投手に起用することはしなかった。そして、だれしも不思議に思う者はなかった。チーム内の暗黙の了解、というヤツであろう。

## お別れの時

今日の試合は今までと違う意味合いを持っていた。秋季大会は六年生最後の公式戦である。しかも、今大会、レッドダイアモンズは四連勝してとうとう七年ぶりに決勝戦に臨むこととなったのである。

◆◇◆

由華と知春の暮らすマンションは生前に夫の真吾が購入したもので、毎月の住宅ローン返済額は月十一万円ほどである。　パート収入しかない母子家庭にとってこの額はとても払えるものではなかったが、夫が購入したということもあって、実家から月々四万円の援助があり、これによってぎりぎり返済が賄われていた。

ところが、先月実家では義父が亡くなり義父の厚生年金や企業年金が義母の遺族年金に取って代わられ、実家はとたんに生活に余裕がなくなった。こうなると、由華としてもこれ以上実家の援助に甘えるわけにはいかなくなった。かといって、今マンションを売却しても、住宅ローンの残金と売却額には大きな開きがあり、新たに資金を借り入れない限りこれも不可能なことだった。

由華が困り果てていたところ、知り合いの不動産屋経営者から返済額に相当する月十一万円なら賃貸で借り手が見つかりそうだ、との話があった。由華にとっては有り難い話であり、またそれ以外の選択肢も見つからなかったため、由華と知春はもう少し田舎で安い家賃の住居へ移ることになった。

知春にとって、小学校の転校はあまり寂しいと感じられなかったが、約三年半野球をしてきたレッドダイヤモンズとのお別れは少しつらいことだった。彼は、どんなに試合に出れなくとも、一緒に練習をしてきたチームメートと最後まで野球をしたいと言う気持ちで

一杯だった。
　由華が知春を伴って青山監督に退部の申し入れをした時、監督は知春の寂しそうな目を見て、何かの意志でもって胸が一杯になるのを感じた。

## ラストゲーム

この試合は知春にとって、レッドダイアモンズでの最後の試合になった。しかも、チームとしても七年ぶりの優勝のかかった試合であった。

しかし、今日も知春の出番はないだろう。それでも、知春は最後の試合にベンチでこれ以上出せないというような力一杯の声を出して応援することを心に決めていた。

決勝戦の相手は夏の大会で優勝したモンスターズというチームだった。　主将の張（ちょう）君は小学生ながら身長百七十三センチという並外れた体格の左腕投手である。剛速球投手ではないがコントロールが良くスタミナも抜群で七回を投げ切っても全く疲れを見せることがないという。　また、張君は打撃も得意で、この大会ではなんと四試合で六ホームラン。十二打数八安打六ホームラン二十打点という驚異的な成績だ。

しかし、このチームは張君一人で勝ってきているチームではない。三十二チームあるM市の中で、選抜選手を一チームで三名も出しており、クリーンナップは強打者揃いのレッドダイアモンズ以上とも言われている。　しかも守備の方も安定していて今大会ではエラーがまだ記録されていない。公式戦の投手経験者も張君の他に六人もいて、誰が投げてもそこそこの結果を残している。　このところ二回戦敗退が常であったレッドダイアモンズとはそもそも選手層の厚さからして違うのだ。

青山監督はまたとない『優勝』というビッグチャンスを目の前にして、相手チームに気後れするどころか大きく武者震いをした。

全員が監督の周りに輪になり、いよいよ先発メンバーの発表である。

「一番、ライト和田！」「はい！！」

「二番、ショート岡田！」「はい！！」

「三番、レフト代田！」「はい！！」
「四番、センター青山！」「はい！！」
「五番、ファースト米山！」「はい！！」
「六番、キャッチャー大迫！」「はい！！」
「七番、セカンド白井！」「はい！！」
「八番、サード鎌谷！」「はい！！　？？」
　選手たちの誰もがこの瞬間、ええっ！？　と思ったに違いない。今年ずっと先発投手だった鎌谷がサードに入っている。
　サードは六年生斉藤君がレギュラーだった。もしかして、斉藤君がピッチャー！？
「九番」
　青山監督は一呼吸置いた。そして再び言った。
「ピッチャー酒井！」
「！　……」
「おい！　酒井！　酒井知春！　返事はどうした！」
「あっ、はっ、はい！！」
　唖然とする選手たち。最も驚いているのは指名された知春自身だ。
　青山監督は言った。
「今回斉藤はいい時に代打で使う。メンバーの入れ替わりがあるが、今日はゼッタイに勝つ！　勝ちに行く！　六年生は最後の試合だ。今までの力を全部出し切るつもりで全力でいけ！　鎌谷、おまえも投げるから守備の時にも肩が冷めないようによく動かしておけ」
　試合前の守備練習が始まった。レッドダイアモンズの先発メンバーがグランドに散っていった。　鎌谷コーチは控えのキャッチャーからボールを受け取りノックを始める。知春は、キャッチャーの大迫を相手にベンチの横でピッチングを始めた。
　これを見て母親たちは色めきたった。
「酒井君だ。鎌谷君はサード守ってる！」
「ええっ！？　どういうこと？　ふざけてるんじゃないの」
「フェイントだ。フェイントに決まってる。ほら、アテ馬ってヤツ

じゃない？」
少し離れたところにいた由華には、今ベンチの脇でピッチング練習をしている選手が先発投手などとわかる訳もない。しかし、試合直前にフィールドへ出ている知春の姿を見たのは初めてだ。
――何？　何？　どういうこと？

相手チームの守備練習も終わり、いよいよゲーム開始の時刻になった。　両チームの全選手がそれぞれベンチの前で中腰になって主審の合図を待っている。
大きな叫び声を上げて一斉に選手が走って行き、向き合って整列した。相手チームのうち二人の選手は頭一つ完全に抜きん出ている。主将で四番、エースの張君と三番で強打・強肩・俊足と呼び声の高い小比類巻（こひるまき）君だ。二人ともがレッドダイアモンズの青山君とともにM市選抜チームのクリーンナップを構成する中心選手だ。彼らは選抜チームの練習で青山君と他チームの代表選手のことを『ミニラちゃん』と呼んで親しんでいたが、今日は互いに睨み合いの火花が散っていた。
秋季大会決勝戦の試合は始まった。
そしてもう一つ。知春にとってレッドダイアモンズでの最後の試合が始まった。

## マウンドの感触

知春が小走りにピッチャーマウンドに向かった。三年ぶりのマウンドである。ピッチャーマウンドどころか、これまでは試合で守りにつくことすらなかった知春だった。慌てずにゆっくりとマウンドの感触を確かめながら知春は規定の投球練習を始めた。

スパーン！

小気味のいいミットの音がした。二球・三球と続けて快速球が美しいフォームから繰り出され、ほぼキャッチャーミットの構える位置ではじけた。

先発予想が狂ったと見えて明らかに相手チームの監督はいらついている。剛速球で時にノーコン投手の鎌谷を想定して練習をしてきたからだ。

由華は知春の姿を見て胸の鼓動が最高潮に達し緊張の極限状態となっていた。他の母親たちはじっとマウンド上の知春を見つめている。気が付くと増島総監督が由華の脇に立っていた。

「ほう。トモくんが先発投手か。これは面白くなりそうだな」

そして主審の「プレイボール」という声が響いた。

◆◇◆

相手チームの先頭バッターはびっくりするほどの小柄な選手だ。小柄な選手がさらに屈みながら小さく構えているので、ストライクゾーンが極端に狭く、またベースに完全に被ってしまっているため、ピッチャーとしてはかなり投げづらそうな打者である。鎌谷君が先発であったなら、腕が縮込まってしまって自慢の剛速球がうまく決まっていたかどうかわからない。もしかしてフォアボールでランナーを背負い、自滅のパターンが意外に早い時期にきてしまっていたかもしれない。完全に鎌谷君を先発ピッチャーに想定した作戦だ。

知春は初球、真ん中高めのストライクゾーンへ快速球を投げ込み、

ベースに被っている打者の上体を一旦起こさせた。続いて外角低めを取りストライク。そして三球目は内閣高めにややボール気味のつり球を投げ空振りさせ、三球で三振にしとめた。普通この場面では応援の母親たちから大きな拍手と歓声が沸きあがる。しかし、今日の応援席はシンと静まり返ったままだ。

相手チームの監督が準備を始める次々打者に指示を出している。いらついているためか、大きなジェスチャーを混じえているので、声は聞こえなくとも言っている内容は丸わかりだ。青山監督は腕組みをしながらそのジェスチャーを小さく声に出して語訳した。

「おい。高めは意外に手元で伸びるぞ。上からかぶせる感じでスイングしろ。それからつり球に気を付けろ。ゼッタイに振るな。ってか。ははは、丸聞こえも同然だぜ」

由華と増島総監督は青山監督の真後ろにいたので、彼の独り言のような声も良く聞こえた。

「まあ。すごい。ジェスチャーであんなことまでわかるなんて」と由華。

「いやいや、そんなに難しいことではないよ。野球をしたことがある者ならば腕の動きから充分推測出来る内容だ」

増島総監督が首を横に振ってそう言った。

三球三振だった相手の先頭バッターが監督のもとへ戻ってきた。相手の監督は険しい顔をしてまたジェスチャーを混じえてその選手に言葉を掛けた。これを見ながら、また青山監督が語訳を始めた。

「このボケカス！　役立たずの豆タンクの小便小僧！」

由華はこれを聞いて目を丸くしながら言った。

「まあ。豆タンクの何々って、そんなことまでわかるのってすごい！」

増島総監督はすぐさま言葉を返した。

「いやいや。そんなこと言っとらんだろう」

「あら。そうなの」

二番バッターは初球の低いボール球を見送ったあと、二球目に高

めに伸びてくるボールの下をこすりセカンドフライでアウトになった。たったの五球でツーアウトである。知春の美しいフォームから繰り出された一見打ちやすそうなボールは、リリースポイントが充分前の方にきているため、ボールの回転が良くベースの前ですうっと伸びてくる。しかしこの後、大人並みにパワーのある三番小比類巻君と長距離砲の四番張君に対しては、たとえ詰まらせても知春の軽めのボールでは外野の奥の方へ持っていかれる怖れも充分にある。特に小比類巻君は速球打ちが得意で、普段からバッティングセンターの百二十キロの超高速マシンで練習を重ねている。ここは丁寧に低目をついていくしかない。

小比類巻君がぶんぶんとバットを振って打席に入ろうとした時、タイムがかかった。青山監督がサードを守っていた鎌谷君を指差して選手の交代を主審に告げたようである。

選手や応援の母親の誰もが、ピッチャーが知春に代わって鎌谷君、知春がベンチに下がり、サードに六年生レギュラーの斉藤君が入るものと予測した。ところが、青山監督が主審に告げたのは、何とピッチャーの知春とサードの鎌谷君のチェンジ、ということだった。

監督は何故か知春にこだわっているのだ。

母親の皆がざわざわとしている。明らかにブーイングだ。しかし、青山監督は皆と目を合わさず口を横に結んで定位置へ戻った。

鎌谷君は生き生きとしていた。和田君は控えのピッチャーとしていたが、『投げられる』というだけで、頼りにはならない。自分一人でマウンドを守らなければならなかった鎌谷君にとって、後ろに知春がいることだけで大きな安心感があった。プレッシャーに弱いことが欠点だった鎌谷君も、今まさに気力が充実し切っていた。

類い稀なる剛速球投手、鎌谷君の本領は発揮された。

小比類巻君は鎌谷君のボールをかろうじてバットに当て、くらいついていったが、とうとうスリーストライク目には完全に振り遅れ、バットが空を切った。三者凡退でチェンジだ。応援席は大歓声である。知春が三振を取った時の様子とは雲泥の差である。

青山監督が鎌谷コーチに言った。
「おいおい、今日は一段と球が走ってるぞ。百三十キロを超えたんじゃないかい？」
その後ろにいて由華と並んで観ていた増島総監督は、「いやいや、それはちょっと大袈裟だな。振り遅れてるからそう見えるんだ。しかし、確かに早い。というか、球に気合が乗っているな」と言った。
主砲、小学生離れした張君との勝負は次のイニングに持ち越された。

◆◇◆

相手投手の張君は剛速球投手ではないが、小学生離れした百七十三センチの長身から角度のあるボールをズバズバと投げ下ろす。しかも左腕のやや変則的な投げ方であり、コントロールも良いのですぐに追い込まれてしまう。レッドダイアモンズの一回裏の攻撃も三者連続三振だった。
二回表、鎌谷君は張君に初球をライト前に弾き返された。彼も鎌谷君の剛速球には振り遅れていて、かろうじて当てたという感じの打球だった。　ランナーを背負い、とたんに鎌谷君の顔色が変わった。
その時またもタイムがかかった。ピッチャーの交代である。スタートの状態と同じように、知春と鎌谷君が交代し、ピッチャー知春、サード鎌谷君になった。
それからまた、投手戦が始まった。
相変わらず知春への応援はない。しかし、両チーム『〇』行進の中、知春はレッドダイアモンズの仲間との最後の試合を必死で投げていた。三番の小比類巻君と四番の張君の打席では剛速球の鎌谷君が投げる。その他の打者に対しては小気味良く知春が快速球で、打たせて取る。風変わりな連携は相手チームの打撃を六回まで張君のシングルヒットの二安打に封じ込んでいた。

最終回七回表の相手チームの攻撃は三巡目の三番小比類巻君からの攻撃だった。知春と鎌谷君が例によって交代し、鎌谷君がマウンドに立つ。鎌谷君は全力投球とはいえ、二人の打者に二回しか投げていないので、スタミナは充分のはずだった。しかし、最終回というプレッシャーが彼の心理に微妙な変化をもたらしていた。

小比類巻君はファールで十三球も粘った挙句にフォアボールを選んだ。その後、四番の張君に対してストライクが入らない。ワイルドピッチでランナーを二塁に進塁させたあと、張君にセンター前に弾き返され、とうとう土壇場の最終回で一点を与えてしまった。その後、知春が踏ん張って後続を断ちチェンジとなったが、最終回の一点は相手投手が張君でスタミナを充分残しているだけに、チームに重くのしかかった。

## 「僕、強くなって……」

最後の攻撃に臨む子供たち。その顔は皆こわばったような表情だった。

「勝てるぞ！　一点差だ。まずは同点だ！」

青山監督は相手チームにも聞こえるような大声で叫んだ。

由華は、紅白戦試合中の、知春と青山監督の会話を思い出していた。母由華の噂のせいで、知春がチームから孤立し始めていた頃、彼はたった一度だけ野球を辞めたいと意志表示したことがあった。

◆◇◆

三年前。低学年の紅白試合。知春は当時まだ二年生だ。

青山監督は知春に代打で打席に立つよう指示をした。

知春は監督に逆らった。

「僕、打てない」

「何？　どういう意味だ。早く打席へ急げ！」

「足怪我したので打てない」

青山監督が足を見る。ついさっきまで普通に守備練習をしていたし、紅白戦前のランニングでも普通に走っていた。

「うそをつけ」

「僕、チーム辞める。だから打てない」

「馬鹿！」

青山監督は知春の横っ面を引っ叩いた。びっくりしたのは近くにいた由華の方だ。由華は自分のせいでつらい思いをしていた知春の心中を察して、二人の前へ出た。

「お母さん、紅白戦といえども試合中です。フィールド内に入らないで下さい」

「いえ、もううちの子、辞めさせます。子供につらい思いさせてまで、野球をやらせたくありません。本人にとっては理由もなく試合

に出させてもらえない。いえ、全部私のせいですから……」
知春の手を掴んで去ろうとした由華を脇にいた増島総監督が制止した。
「青山監督に任せるんだ！　彼は知春君のことを思いやっている。それに彼は純粋に知春君に野球を教えてうまくなって欲しいと思っている」
増島総監督は由華の目を真っ直ぐに見て言った。
青山監督は知春に声を掛けた。
「君は人より強くなりたいんだろう？　お父さんがいないから、お母さんは君に野球をさせたんだ。何故だかわかるかい？　お母さんはね。君がお父さんがいなくても強く生きていける様にって言ってたぞ」
――ええっ？　そんなこと青山監督に言った覚えないよ……。
知春が由華の方を見た。青山監督は続ける。
「それでも君は野球を辞めるつもりか？　お母さん悲しむぞ」
「……」
「だからね。お母さんは君にお父さんみたいに強くなって欲しいんだよ」
――いえ。そんなこと思ってないし、子供にそんなこと言っても無理よ。
由華は知春の顔を見た。そして驚いた。
知春が泣きそうな表情をしている。滅多に見せない表情。回りにいた子供たちの目には、知春が怒られていると映ったのか、皆おどおどと白い目をしている。
由華は突然泣き出した。青山監督は慌てた。
「ちょっちょっちょっと。お母さん。お母さんが泣いてどうするん

ですか」
それを見て知春が言った。
「僕、強くなってお母さん守る」
――ええ！？　今何て言ったの？　知春……。
増島総監督が叫んだ。
「ようしそれだ！　男の子はそれじゃなけりゃいかんね」
青山監督も続けた。
「よし、じゃあ早く打席へ入れ」
知春がバットを拾って打席へ向かった。
「あっ」
由華は小さな声を発した。
――あなた……。
由華は打席へ向かうまだ小さな我が子の横顔に、ふと亡き夫の面影を見た。

## 世代を越えて

鎌谷コーチはこの最終回に打順が回ってくる我が子に入念にアドバイスをしていた。この回は下位打線の六番大迫君からの打順である。大迫君はパワーヒッターであるが緩い球には滅法弱い。

案の定大迫君は緩い球に泳がされてセカンドゴロでアウトになった。

続く七番の白井君は、相手投手の張君のボールにカスることすら出来ない。苦肉の策でバントヒットを試みたが、ピッチャーの真正面に転がるゴロであえなく沈んだ。

選手たちは精一杯の声をあげて応援していた。もちろん応援の母親たちも同じだ。その声は悲鳴に近くなっていた。二アウトをとられた時にその声は諦めの入り混じった愚痴に変わっていった。

「何よ。あのピッチャー。あれずるいわよ。あれ大人とおんなじじゃない？　最後くらい正々堂々と普通の小学生出してこれないのかしらね」

「そうそう。少年野球であんなのゼッタイフェアじゃないわよ。みんな小さいなりに一生懸命やっているのに」

「張君っていうんでしょ？　あのピッチャー。ガイジン助っ人連れてきて、そこまでして勝ちたいのかしらね」

最後に『ガイジン』と言ったのは事もあろうに青山監督の奥さんだった。たまりかねて監督は奥さんのもとへ行き言った。

「ちゃんと応援しないなら、帰ってくれ。六年生にとっては大切な最後の試合なんだ」

最後の打者になるかも知れない鎌谷君が打席に向かおうとした時、青山監督は鎌谷君のスパイクシューズの紐が切れたと言ってタイムを要求した。

◆◇◆

増島総監督は試合が中断している間、由華に亡き夫がレッドダイアモンズでプレーをしていた頃のことを話した。

「酒井君は低学年の時からずっとチームのエースピッチャーだった。知春君のように綺麗な球を投げるいいピッチャーだった。当時鎌谷コーチも同学年でピッチャーだった。巡り合わせというか、おもしろいものだね。今の鎌谷君とちょうど同じようにちょっとノーコンの剛速球投手だったんだ。二人はずっと五年間、チームを卒団するまでライバル同士だった。鎌谷コーチは負けず嫌いで酒井君にはいつでもライバル心をむき出しにしていた。でも、結局酒井君を超えることが出来なかったね」

由華は夫がレッドダイアモンズでプレーをしていたことは知っていたが、鎌谷コーチが当時一緒だったことは初耳だった。そして由華は当時の話を聞かされて今の知春と鎌谷君にその姿を頭の中でだぶらせた。しかし、当時と決定的に違うことは、知春がエースピッチャーどころか、三年半という間、試合にも出させてもらえない状態であったことだ。

「鎌谷コーチは、子供が知春君にだけは負けて欲しくないと思っていた。時代を超えてライバルが受け継げられたってわけだな。スポーツの世界のライバルっていうのは純粋なものだ。妬みや恨みはもともと心の中で排除されているんだよ。だから、鎌谷コーチは何か別なことが原因で試合に出させてもらえない知春君に自分の子供が形の上で勝っていてもそれは彼にとって決して勝ったことにはならないんだ。鎌谷コーチは知春君の最後の試合に彼を使ってくれるように青山監督に進言した。青山監督はもともと知春君の実力は認めていたし、父母会の圧力とはいえ、監督として彼にはすまない気持ちで一杯だったから、二つ返事でこれを受け入れたんだ」

――増島さんは、今日のこの試合で知春がピッチャーとして出ることを知っていたんだ……

「鎌谷コーチはいつも息子の裕也君に知春君にだけは負けるなよ、と言っていたらしい。しかし、試合に出させてもらえない知春君に対して勝つも負けるもないよね。裕也君は親同士が昔ライバルだったことを知らないが、いつも知春君を意識して練習していたことは確かだ。練習中にライバル心をむき出しにしていたからね」

増島総監督は、最後にこう付け加えた。

「こんなにすばらしいことはないじゃあないか。互いにライバルとして、そして試合では最高の仲間としてやれるなんてね」

由華は心の中で増島総監督、青山監督、そして鎌谷コーチに心から感謝して目を閉じ、胸に掌を当てた。真のスポーツマンシップというのはこういうことをいうのかも知れないと感じた。

## さよならのホームイン

鎌谷君のスパイクシューズの紐が本当に切れたかどうかはどうも疑わしい。当の鎌谷君がきょとんとしているからだ。鎌谷コーチは自分の靴紐を抜いて我が子に靴紐を変えるように言い、渡した。そして、さらにもう一方の靴紐を抜き、ネクストバッターズサークルにいる知春を呼び寄せ同じように靴紐を変えるように言った。一足のスパイクシューズの紐が鎌谷君と知春のシューズをおのおの片方ずつ縫うことになった。

何やらごそごそと靴紐を交換している姿を見ながら、主審は不愉快そうな表情をした。青山監督はこれを察して脱帽して審判に謝罪した。

鎌谷君が打席へ向かった。マウンド上の張君は余裕綽々に白い歯を見せた。

母親たちの断末魔にも似た応援が始まった。青山監督はじっと腕を組みながら見守っている。

プレイが再開し張君は大きく振りかぶってボールを投げた。真ん中高めの速い球だ。バットは空を切り鎌谷君はそのまま尻餅をついてしまった。

「ああ」皆が一斉にため息をついた。とても打てそうな感じがしない。

二球目、また同じところへ速い球がきた。次の瞬間、打ちにいった鎌谷君の二の腕にボールが当たって転がった。球審は一塁方向へ掌を出した。デッドボールだ。手段はどうあれ、遂に同点のランナーが出塁したのだ。

その時相手チームの監督が飛び出してきた。

「審判！　今のは完全なストライクだ！　デッドボールじゃない！」

「……」

「審判！」

青山監督は俯いた。相手の監督が主張するとおり、今のはストライクと言われても仕方がないようなボールだ。しかし、彼は心の中で思った。

――ストライク・ボールが覆される訳がないだろ。バーカ！

案の定、球審は首を横に振り相手監督の主張を却下した。そしてベンチへ下がるよう指示した。　相手の監督は地団駄を踏みながら戻って行った。

応援の母親たちは思いもかけず訪れた僅かなチャンスに色めき立った。　そして次の打者は誰もが代打の斉藤君だと思った。ところが青山監督の心のうちは決まっていた。次の打者は今日唯一、張君から二安打している知春だ。斉藤君はがっかりしてるかと思いきや以外にも大きな声で叫んだ。

「トモー！　頼んだぞ！」

ゆっくりと素振りをして打席に入る知春。由華は一瞬どきっとした。子供ながらその横顔にはっきりと亡き夫の面影を見たのだ。血がつながっているから当然かも知れない。しかし、由華にはただそれだけのことには思えなかった。

◆◇◆

最終回七回の裏、一対〇の僅か一点差を追うレッドダイアモンズ最後の攻撃。知春にとってはチーム最後の試合。

二アウトランナーは一塁の鎌谷君。

打席の知春は相手のキャッチャーが大柄なので、やや小柄に見える。

知春は緊張した面持ちでバットを垂直に構える。

じっと腕組みしている青山監督。そして大声をあげる鎌谷コーチ。

ベンチでは今までにないことが起こっていた。

選手たちが全員、声を枯らして知春の応援を始めたのだ。しかし

知春にはこれを驚いている余裕などない。
選手のお母さんたちはというと、声に出して応援する人こそいないが、ほとんどは、顔の前に両手の指を絡ませながらのお祈りスタイルだった。
相手投手の張君は、一塁ランナーの鎌谷君を睨んでボールをセットした。
一球、二球と続けざまにアウトコース低めぎりぎりのところへストライクが入った。
「いいぞ。好きなところを狙っていけえ！」
知春もチームも土壇場に追い込まれたが、鎌谷コーチはあくまでリラックスさせることに一生懸命だった。
張君はツーストライクをとって、セットポジションをやめた。走るなら走れ、と言わんばかりだ。
大きく振りかぶった。一塁の鎌谷君がスタートを切った。
張君は最後の一球となるかも知れないボールをビュンと腕をふってキャッチャーミットめがけ投げ込んだ。

カキーン！

知春の打球は正にジャストミートだった。
左中間のほぼ真ん中へ打球が飛ぶ、やや浅めに守っていたレフトはあと二・三歩追いつけず、グローブをボールが越えた。
センターの強肩小比類巻君が回りこんで外野深いところでボールに追いつく。しかし、慌てて少しボールをジャッグルした。
ショートは中継位置にセットし、バックホーム体制をとった。
鎌谷君は既に三塁手前まで走りこんできている。土壇場での同点は確実だ。
張君は送球を待っているショートの選手に体当たりした。
「どけ！　じゃまだ！　俺が刺す」ショートの選手はその場で転んだ。

鎌谷君が遂にホームインした。同点だ！　応援の母親たちは跳び上がって正に歓喜の渦中だ。
打者走者の知春も三塁手前まで達していた。
ひょっとしてサヨナラかも？
またしても今までにないことが今度は応援の母親たちに起こっていた。　母親たち全員が声を枯らして「トモー！　トモー！」の大合唱を始めたのだ。
ところが……塁上では起こりえないことが起こった。
知春が三塁を回ったところで何と相手の三塁手と交錯したのだ。まともにぶつかって知春は三塁とホームの間で無残にも転がった。
その時、中継の張君からキャッチャーへ矢のようなボールが投げ込まれた。
本塁はもう間に合わない。知春は懸命に起き上がり三塁へ戻ろうと走りだすが、その足は止まった。
「ああ！」母親たちは一斉に叫んだ。ボールはキャッチャーから三塁のカバーに入ったショートの選手へ送られて、知春は胸をグローブでタッチされた。知春は泣きそうな顔をしているがどうにもならない。万事休すだ。　レッドダイアモンズサイドの空気は一気に冷え固まった。
球審はファールのように手をあげて叫んでいる。しかし、相手チームの歓声で聞こえない。
相手チームの応援の声が静まった後、球審はもう一度大きな声で叫んだ。
「オブストラクション！」
――何？　何？　いったいどうしたの？
増島総監督が叫んだ。
「三塁手の走塁妨害だ！　やったぞ！　やった！」

球審は知春に向け、小さな声で言った。
「君。ホームインしなさい」
何が起こったかわからず、きょろきょろする知春。
青山監督が掌でラッパを作り大きな声で言った。
「酒井。早く。いいからホームインしろ」
知春が鎌谷君の待つホームへ歩いていってホームベースを踏む。
球審が天を仰いで大きな声で言った。

「ゲームセット！！」

レッドダイアモンズ、二対一のさよなら勝ちとなった。
再びレッドダイアモンズサイドは歓喜の渦に巻き込まれた。
知春と鎌谷君はホームベース上でどちらからともなく手を出して、がっちりと握手した。

母、由華と息子の知春はぴったりと同じ想いだ。
そして、亡き夫、真吾の想いも多分同じ……。
さよならのホームイン。

――さようなら、鎌谷君。

――さようなら。監督、コーチ、選手の仲間たち。レッドダイアモンズ。

二人のシューズには同じ一足の靴紐がそれぞれ結ばれている。
そして、二人の心にも、同じ『靴紐』が結ばれたかも知れない瞬間だった。
酒井君と鎌谷君。
それは二世代、時代を超えて結ばれたものだった。
＜「さよならのホームイン」完＞

## さよならのホームイン（後書き）

この作品はフィクションであり、物語の内容及び登場する団体・人物などの名称はすべて架空のものです。
なお、執筆にあたり、野球オンチな筆者に色々と教えて下さった監督さま、スコアラーの奥様へ心より感謝申し上げます。

【華】

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7169v/

さよならのホームイン

2011年8月13日03時32分発行